



|              |                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 初期英和辞典の編纂法                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| Author(s)    | 早川, 勇                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| Citation     | 大阪大学, 1997, 博士論文                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| Version Type |                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/40876">https://hdl.handle.net/11094/40876</a>                                                                                                                                                                                               |
| rights       |                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

|            |                                                                             |
|------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 氏名         | 早川 勇                                                                        |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士 (言語文化学)                                                                  |
| 学位記番号      | 第 13455 号                                                                   |
| 学位授与年月日    | 平成 9 年 11 月 28 日                                                            |
| 学位授与の要件    | 学位規則第 4 条第 2 項該当                                                            |
| 学位論文名      | 初期英和辞典の編纂法<br>(The Compiling Method of Early English-Japanese Dictionaries) |
| 論文審査委員     | (主査)<br>教授 玉井 俊紀<br>(副査)<br>教授 平田 達治 教授 森住 衛                                |

### 論文内容の要旨

#### 《英和辞書史にみられる 2 つの歴史観》

日本の英語辞書史研究において、際立った 2 つの歴史観が存在する。1 つは、豊田実(1939)の考えである。英和辞典が底本とした辞書により、オランダ系・イギリス系・アメリカ系・中国系の 4 つに分類した。この 4 大系統論は現在でも学会で認められているが、明治初期の英和辞典を丹念に調べていくと初期の英和辞典でさえ混交型が基本であることがわかる [1.5, 2.3]。この系統論は事実を反映していない。『英和对訳袖珍辞書』(文久 2 年。以下『袖珍辞書』)は H. Picard の辞書だけでなく、細部において J. Holtrop の辞書も利用している可能性がある。訳語についても『和蘭字彙』のみならず英華辞典も参照している [1.3]。『袖珍辞書』(慶応 2 年版)の附録には Noah Webster 辞書と D. Bomhoff 英蘭辞書が利用されたと推測される。『改正増補和訳英辞書』(明治 2 年)の発音表記にはホルトロップ辞書が利用された可能性が大きい [1.4]。明治 5 年出版の『英和字典』も数種の辞書を参照して編纂作業を行った。収録語彙の決定に P.A. Nuttal の超小型辞書を利用し、発音等にはウェブスター大辞典の 1864 年版を参照し、訳語は先行の英和辞典と V. Lobscheid の英華字典などに拠った。

もう 1 つの歴史観は町田俊昭(1968)の研究にみられる。氏は英和辞典をその説明の精度により A(A')~E まで 6 段階に分けた。この格づけによると『袖珍辞書』は精度 D である。明治 45 年出版の入江祝衛『詳解英和辞典』でやっと精度 B に達する。町田氏自身はこれを歴史観だと考えていないが、明らかに歴史観を内包している。この精度の歴史観からすると、ほとんどの学習英和辞典は歴史の闇に葬り去られ、明治初期英学者の辞書編纂に向けた情熱や辛苦は抹殺される。本研究は上記 2 つの歴史観を否定するところから始まった。

#### 《初期英和辞典の編纂法》

本研究の中心的課題は、初期の英学者が複数の英語辞書を底本として利用者のニーズに答える英和辞書をいかに編纂したかを解明することである。これは編纂者の立場にたつ史観であるが、2 カ国語辞書の場合には編纂に際して利用者のレベルや要求なども考慮せざるをえないので、利用者の立場にもたつ。この視点がない限り、辞書学の 1 分野である辞書史または辞書系譜学(lexical archaeology, archaeological lexicography)への道は開かれない。

この視点で『袖珍辞書』から『附音挿図英和字彙』への英和辞書の歴史を探ると、初期英和辞典編纂に明確な1つの方法がつかめる。明治初期の辞書でさえいくつかの辞書項目に分解し、それぞれ個別に作業を進め、最終的に統合する編纂方法を採用している。これを「集約的辞書編纂」と呼ぶ。辞書項目は時代が進むに従い、収録語彙・分節法・品詞表示・アクセント表示・発音表記・日本語訳・熟語・用例・語法・文体表示・挿絵・不規則動詞表・各種附録などに分けられる。この集約的辞書編纂は『英和字彙』においてその完成をみる。各辞書項目毎に複数の辞書を利用している。日本語訳の付与には『袖珍辞書』を利用しただけでなく、新たな漢語表現を求めてロブシャイト英華字典を参照した[3.5]。ロブシャイト字典を丹念に読む作業と並行して用例・熟語として適当なものを選択した。熟語の選定にはウェブスター大辞典も参考にした可能性がある。熟語の訳語には『袖珍辞書』だけでなく『英文熟語集』も参看した[3.6]。収録語彙決定には、『改正増補和訳英辞書』と J. Ogilvie: *The Student's English Dictionary* を参照したと推測される。この2つの辞書の収録語彙を合わせると、ほぼ『英和字彙』の見出語と同じになる。最終的には編纂者の言語直感によって収録を決定した[3.4]。品詞表示と語法説明はオウグルビーの *The Comprehensive English Dictionary* をそのまま転載した[3.6]。発音はすでにウェブスター式が優勢になりつつあったにもかかわらず *Comprehensive* のカル方法を採用した[3.3]。挿絵は大辞典 *The Imperial Dictionary* から採った。一部はウェブスター大辞典(1864年版)からも採取した。附録の一部は『和訳英辞書』の附録に手を加え、さらに一部は *Comprehensive* をそのまま転載した[3.3]。底本とする辞書のそれぞれの利点や特徴を踏まえ、各項目ごとに中核とする底本を決め、それを基に各項目の執筆を行い、最終的に編纂者の頭の中で底本や参照本が不明なほどにそれらを総合するという編集方針を採用している。この編纂法において重要な点は、複数の辞書項目に分解できるので項目ごとに最も適切な原本を選択することが可能だということである。そこには選択の問題がある。純粋に言語学的基準や日本人初学者にとって分かり易いという教育的基準によって選ばれる。この選択の問題や基準などは英和辞典編纂史において無視されてきた。

#### 《本研究における発見》

幕末以降における英和辞典の編纂過程を問題とした精密な研究はない。筆者はこの観点から研究を進め多くの発見をし、各種定説を覆した。『エゲレス語辞書和解』の底本については諸説があったが、ホルトロップ英蘭辞書であることを突き止めた。収録語彙をそのまま利用したわけではなく、派生語を削除した[1.2]。未完に終わった福地源一郎の『大英字典』には特定の底本はなく総合型というのが定説であったが、これは誤りであることを明らかにした。底本はボムホッフ英蘭辞書で、かなり忠実に翻訳を試みた[1.2]。『袖珍辞書』の底本はピカード英蘭辞書であるが、この辞書の収録語彙はジョンソン辞書の流れを汲むものであることを発見した[1.3]。その影響で専門語彙が不足している。これを補うために専門語彙集が明治の初年に多く上梓された。この歴史的事実は『袖珍辞書』の欠陥の補填としては理解されてこなかった[1.6]。『英和字典』の原本はナットールの *The Standard Pronouncing Dictionary of the English Language* であるという定説は完全に覆された。Routledge's *Diamond Dictionary of the English Language* を利用して収録語彙を決定した[2.2]。これまでナットール系と言われていたほとんど全ての英和辞書が、上記辞書の書名だけを替えた *Routledge's Desk Dictionary of the English Language* という超小型辞書に依拠している[2.2]。また、『英和字彙』はオウグルビーの *Comprehensive* のみを底本とするという俗説が事実から程遠いことを実証した。

#### 《底本・参照本とした蘭英米の英語辞書》

英和辞書史を扱う場合、単に日本国内における特殊な状況の解説という形式をとるのではなく、世界の英語辞書特に蘭英米における辞書界から明治初期英和辞典を見なければならない。どのような辞書が当時舶載されたかを調査する必要もある。本研究では「蕃書調所」の英語辞書類をほとんど特定した[1.1]。蘭学の知識しかなかった幕末の人々は英蘭辞書を底本として英和辞典を編纂しようと試みた。未完に終わった辞書がいくつかある。その成否は底本としての英蘭辞書の内容と編纂者の英語力のバランスによる[1.2]。ホルトロップやボムホッフの正統英蘭辞書を利用した英和辞典編纂は挫折したが、亜流ともいべきピカードの小型辞書を底本とした編纂は成功した[1.2]。両者の内容には格段の差がある。

18世紀イングランドの知識層に圧倒的な支持を受けたのは S. Johnson 辞書であるが、一般大衆に最も利用されたのは N. Bailey 辞書である。イングランド辞書界には二重構造が存在していた。ジョンソン辞書から C. Richardson 辞書

及び *N.E.D.* に至るアカデミックな世界と実用を本位とした流れである。後者は18世紀末頃からイングランドで明確な流れを形成し始めた。19世紀中頃に英和辞典の編纂を目論んだ日本人は、アカデミックな世界では無視されてきた中産階級及び学生向けのナットール英語辞書を利用した。この二重構造の観点から明治初期英和辞典の編纂を把握しない限り、実相は浮き彫りにされない。

スコットランドの辞書編纂はイングランドのそれとは異なる。明治の英学者はその一派に入るオウグルビーに目をつけた。彼はジョンソンやリチャードソンの辞書を猛烈に批判しウェブスターを礼讃した。特徴の1つは百科事典的内容の豊富さである。専門語や挿絵を多く収録している。もう1つの特徴は、中産階級や学生を対象とする利用者の観点(*user's perspective*)に立った辞書編纂である。その特徴は日常的表現を中心とする用例に最もよく表れている[3.2.2]。スコットランドの辞書はウェブスター辞書と緊密な関係を保ちながら発展した。オウグルビー辞書は内容的・系譜的にアメリカ系だと考えてもよいほどである。

明治時代の英和辞典はすべてウェブスター辞書の影響下にあるといっても過言でない。慶応4年の『英文熟語集』はウェブスター辞書から多くの熟語を採った。『大正増補和訳英辞林』(明治4年)は、ウェブスター大辞書を利用して語数を増やしその発音を付した。『英和字典』(明治5年)は発音・綴り・品詞表記などほとんどウェブスター辞書に拠っている。『英和字彙』にもウェブスターの陰が見られる。初期英和辞典がその後のウェブスター辞書導入の契機となった[1.4.1, 1.5.3, 2.3.1]。明治17年以降出版の英和辞典は1804年版大辞典に負うところが絶大である。しかし、大正時代に入りウェブスター辞書は陰を潜めた。

#### 《日本語訳の発展》

英和辞典の編纂において最も中核となるのは、訳語(*equivalent*)の問題である。このため、英和辞典における意味記述の歴史的展開について論じた。本研究ではまず第1に、和語訳から漢語訳への展開を、漢語の造語力と日本文における挿入可能性の問題として把握することを提案した[3.5]。次に、新漢語の造語や意味記述の深化を論ずるなかで、英語・日本語・中国語の相克に悩む明治英学者の姿を浮き彫りにした [3.5, 4.1]。さらに、初期英和辞典の意味記述における類型化を行った。単に対応語を示すだけでなく、説明的訳語、派生的訳語、機能的訳語などが既に『袖珍辞書』にみられることを指摘した [4.1]。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、幕末から明治のはじめにかけて、日本人が英和辞典をどのように編纂したかを考察したものである。まず、それらの辞書の内容を詳細に検討し、編纂者の伝記、当時の欧米の辞書界の状況を参照するなど、従来の研究に見られない広い視野に立って、辞書編纂の様子を解明しようとする。さらに、欧米文化に特有の事物・思想の訳語がまだ存在しなかった当時、それぞれの辞書編纂者たちは、日本語による語義をどのように案出していったか、その形態、過程をたどっている。

論文は、序の部分でこれらの研究目的を述べる。第1章では、英和辞典として最初の試みとされる『英和对訳袖珍辞書』(文久2年 [1862])およびその改訂版について考察が行われる。第2章では、初期の英和辞典としては過渡期のものとされる『英和字典』(明治5年 [1872])を取り上げ、続く第3章で、本論文の著者が、初期英和辞典の編纂法として完成の域に達したと考える『符音挿図英和字彙』(明治6年 [1873])およびその改訂版について、詳細に検討を加える。

著者が取り上げたこの3種の辞書とその改訂版は、幕末・明治初期の日本人が頼りとしたであろう代表的な英和辞典であり、出版された当時においては、最も充実した内容をもっていたと考えられるものである。

英和辞典は、いきなり白紙の状態で編纂されたのではない。西洋の辞典をもとに作られた。この分野の研究でこれまで見逃されてきたもっとも大きな誤りは、底本は一本であるという前提に立ち、その底本をつきとめることを課題としたという点にある。本論文の著者は、初期の英和辞典の編纂方法を再検討する過程で、この前提に疑問を持ち、

当時であっても、編者たちは複雑な形の編纂方法をとったとの結論に達する。著者の研究が画期的であるのは、底本を特定するに当たって、収録語彙、発音、挿し絵、語義等の個々の領域に注目して検証するという基本に徹した点にある。個々の領域ごとに、異なる(複数の)辞書を底本として辞書を編纂する方法を、著者は集約的辞書編纂と呼ぶが、これこそが、幕末・明治初期において実際に行われた辞書編纂の姿であったことを実証する。

第4章はこれらの英和辞典における語義の変化の問題に焦点を当て、この時期における意味記述の歴史的展開をたどる。この時期に、辞書の語義は和語から漢字語への急速な展開を見せるが、漢字語の造語力と、日本文へのおさまり方の観点から論じている。第1章から第3章までが個々の辞書を対象にした論証であるのに対し、この章では、これら3章全体を貫く太い縦糸に焦点があてられている。この点に関して、論文の著者は、異文化の流入を前にしてことばと格闘する編者たちの苦心を見る思いがする、と述べているが、英和辞典の命ともいえるべき日本語訳に特に焦点をあてたことは、本論文の優れた工夫であると考えられる。最後におかれた結論の章はまとめである。

付録として、巻末に明治期英語辞書年表を掲げ、約400編の辞書について要を得た簡潔な書誌を収載する。学習用の英語辞典をも渉猟し、内容、数において先行の年表を凌駕し、現時点における最も浩瀚なものと思われる労作である。

本論文は、抽出された一部のデータをもとに論を立てるといふ、この分野の研究として一般的な方法をとっている。このような方法によって得られる結論は、辞書全体が、首尾一貫、統一的な方法によって編纂されていることを前提として成り立つ。本論文の著者もその点は承知しているものの、その検討までは行っていない。著者に課せられた将来の課題といえるであろう。しかし、本研究によって定説が改められたり、明らかになった事実は多く、この分野の研究に新境地を開いたといえる。本論文で展開された精細な検証と、そこから導き出された結論は十分な説得力を持ち、現在考えられる最も精緻な初期英和辞典編纂の見取り図を提示したものだといえる。

以上の意義を考え、本審査委員会は、本論文が博士(言語文化学)の学位論文として十分な価値を持つものであると判断する。